

今週の為替相場見通し (2019年2月12日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ	
		注	レンジ	終値		
米ドル	(円)		109.44 ~ 110.16	109.75	108.50 ~ 111.50	
ユーロ	(ドル)		1.1321 ~ 1.1460	1.1321	1.1200 ~ 1.1400	
(1ユーロ=)	(円)		124.18 ~ 125.94	124.32	122.50 ~ 125.00	
英ポンド	(ドル)		1.2854 ~ 1.3104	1.2939	1.2800 ~ 1.3050	
(1英ポンド=)	(円)	*	141.13 ~ 144.18	142.04	140.50 ~ 143.50	
豪ドル	(ドル)		0.7061 ~ 0.7265	0.7090	0.6950 ~ 0.7200	
(1豪ドル=)	(円)	*	77.44 ~ 79.85	77.79	76.50 ~ 79.00	

(データ) 先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 菊池 雄太

(1) 今週の予想レンジ: 108.50 ~ 111.50 円

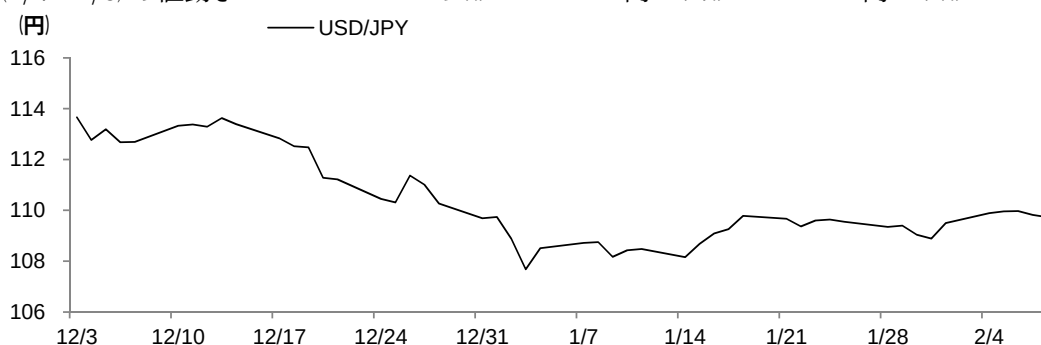
(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週のドル/円相場は横ばい推移した。週初4日に109円台前半でオープンしたドル/円は、中国が春節で市場参加者が少ない中、日経平均株価の堅調推移や米10年債利回りの2.70%台回復を手がかりに上昇し、12月31日以来となる高値110.16円をつけた。しかし、米政府機関の一部閉鎖の影響で延期されていた米11月耐久財受注が発表され、予想を下回ったことから109円台まで反落。5日は再び110円台を回復する場面も見られたが、日経平均株価がマイナス圏に沈むと上値を重くし、米1月ISM非製造業景気指数が予想を下回ったことから109円台後半を推移した。6日はロウ豪準備銀行(RBA)総裁の利下げを示唆する発言を受けた豪ドル/円の下落や、トランプ米大統領の一般教書演説で米中通商協議への具体策が述べられなかったことが重しとなり一時週安値となる109.56円をつけた。7日は一時110円台に乗せたが、クドロー米NEC委員長の「米中通商合意までかなり距離がある」との発言に米中通商協議の進展への期待が後退し、米株が下げ幅を拡大する動きを横目に109円台半ばまで反落した。加えて、トランプ米大統領が、中国との通商協議の期限である3月1日までに習近平国家主席と会談する計画はないことを表明したことも上値を重くした。8日のドル/円は引き続き米中協議が難航しているとの見方などから上値重く109.75で週越した。

今週のドル/円相場は、上値の重い展開を予想する。中国の春節休暇が終わり、中国では14日に1月貿易収支が発表される。米中貿易摩擦の影響から中国の貿易統計は悪化が予想されており、世界景気への影響が懸念される。米ホワイトハウスは、ムニューシン財務長官らと交えた閣僚級の米中貿易協議を14~15日に北京で開くと発表した。閣僚協議は1月30~31日にワシントンで開催されて以来となる。米国は協議期限を3月1日と定めているが、協議で合意出来なければ3月2日に2千億ドル分の中国製品に対する制裁関税の税率を10%から25%に引き上げる構えであり、ヘッドラインリスクを含め、今後の行方に注目したい。また、英国のEU離脱問題では、メイ首相は13日までに英議会に新たな離脱案を示す意向であったが、ユンヘル欧州委員長との議論は平行線に終わったことを受け、今週中の新提案の提示は難しい情勢となっており、合意なき離脱への懸念もありリスクオフへの動きには注意したいところ。

(3) 先週までの相場の推移

先週 (2/4~2/8) の値動き: 安値 109.44 円 高値 110.16 円 終値 109.75 円



(資料) ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 1.1200 ~ 1.1400 122.50 ~ 125.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週のユーロ/ドル相場は右肩下がり推移。週初4日に1.14台半ばでオープンしたユーロ/ドルは序盤に週高値となる1.1460をつける。しかしその後、週末にイタリア中銀総裁が経済成長見通しの下振れリスクに言及したほか、ユーロ圏12月PPIが予想を下回ったこと、加えて米金利の上昇も重しとなり、1.14台前半まで下落。5日は一旦持ち直す動きも見られたが、ユーロ圏1月PMI改定値の総合指数が13年7月以来の低水準となったことが重しとなり1.14近辺まで続落した。6日は、独12月製造業受注が予想を下回ったことや、ドイツの自動車メーカー大手の決算が予想よりも弱い内容だったことから1.14を割り込み、ユーロ圏の景気後退リスクが依然警戒される中で、ドル買いが優勢な地合いになると1.13台後半まで値を下げる展開。7日には欧州委員会がユーロ圏経済見通しを下方修正したほか、仏が「度重なる非難や挑発的言動」へ抗議するため駐伊大使の召還が発表され、仏伊の関係悪化への懸念が強まる中、1.13前半まで下落。その後、一時1.13半ばまで反発するも、8日には欧州の株式市場が軟調な推移となる中で、ユーロ円の連れ安となり、週安値である1.1321をつける。その後もユーロを買い戻す材料に乏しい中で、同水準にて越週している。なお、11日にはユーロの買い材料に乏しい中で1.1267まで下落している。

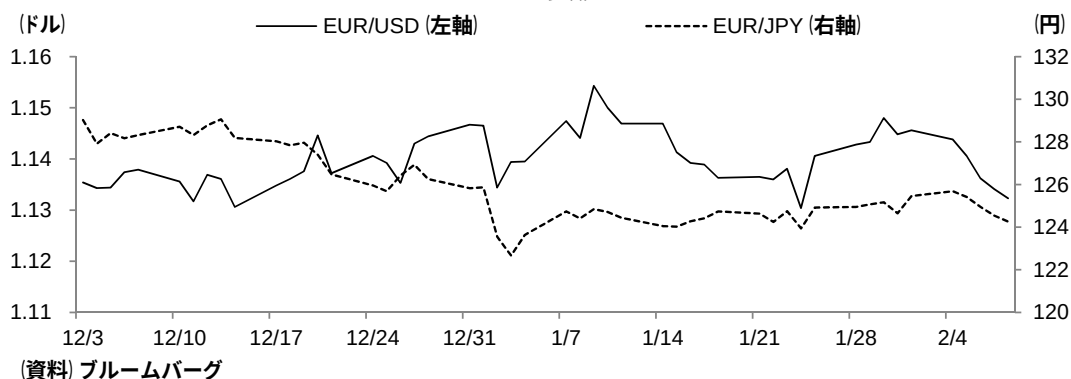
今週のユーロ/ドルは引続き上値の重い展開を予想。足元、米金利は低下、株や原油などのコモディティも下落基調。一方でドルインデックスは上昇基調と、市場ではリスクに対する警戒感が高まっている状況。センチメントを冷やす要因は複数存在するが、特に米中通商問題に関しては、11日から次官級協議が始まっており、14～15日にはムニューシン財務長官やライトハイザー米通商代表部代表らを交えた閣僚級協議が実施される予定。中国の知的財産権の保護などの問題では依然米中間で意見の隔たりがあるとされているが、先週、トランプ氏は通商協議の期限である3月1日までに米中トップ会談がないと言及し、クドロー米国家経済会議委員長は、合意まで「まだかなり距離がある」と述べている。米政権側が交渉の前に中国側の揺さぶりを狙った側面もありそうだが、が故に事態は流動的な側面を多大に有していると言える。また、世界的に景気減速懸念が高まりを見せる足元の経済環境において、とりわけ欧州圏については、先週ECBの景気見通し下方修正、景気減速を示す指標・企業決算が相次いだ。そして、依然としてブレグジットを巡る不透明感やイタリアの財政状況悪化の懸念がくすぶっている状況。冴えない経済環境・早急な事態の解決が望みにくい懸案事項を抱えたユーロが、対ドルや対円で強含む展開は想定しにくいだろう。足元は、ユーロの下落リスクに注意を払うべきだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/4～2/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1321 高値 1.1460 終値 1.1321

(対円) 安値 124.18 高値 125.94 終値 124.32



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2800 ~ 1.3050 140.50 ~ 143.50 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、軟調推移先行から、頭打ち。対ドル、対円での頭打ちが7日までずれ込み、その後の反発も弱かったのに比し、対ユーロでは5日に早々に頭打ちし、週を振り返ってほぼ横ばいで引けるまで反発した。これは、独12月製造業受注(6日)や同鉱工業生産(7日)の低迷を反映し、並行したユーロ安の結果と考えられた。週明け欧州市場は、日系大手自動車会社の英工場における生産計画撤回の報(3日)と共に始まった。英のEU離脱を巡る不透明感を嫌っての決断だが、当然、英雇用・経済成長には大きな阻害要因となり得る出来事で、この間のポンド安の背景をなした。また、4日発表された英1月建設業PMI、5日発表された同サービス業PMIの下振れもポンドの重石となった。英中銀金融政策委員会は、7日、市場の予想通り基準金利(0.75%)、資産購入目標(4350億ポンド)を据え置いた。決定発表後の記者会見で、同中銀カーニー総裁は、英経済減速の可能性に言及した上で、「合意がなく、移行期間もないEU離脱は負の衝撃を与え、(英)マイナス成長の可能性を更に高めるだろう」と警告した。仮に、この局面のポンド急落が、同総裁の発言を受けたものであったなら、その反動としてのその後のポンド急反発は、ある意味、当然の帰結と言えただろう。英中銀(同総裁)は、2016年の国民投票前後から、EU離脱の経済的損失について、一貫して強い警告を発し続けており、そこになんの目新しさも、説得力もないからだ。その後も、英のEU離脱を巡る情勢は一切の進展を見せず、当初、14日と見込まれた、離脱合意に対する下院再採決は、7日に前後して、またしても先延ばしにされるとの観測が広がり、10日の時点で、2週間の先送りがほぼ確定的となった。

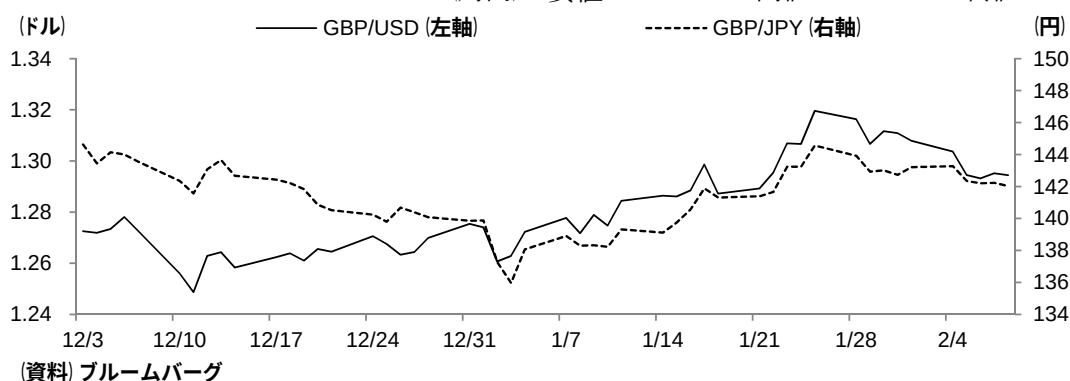
今週の英ポンド相場は、上値の重い膠着を中心に予想。ただし、14日(木)にはEU離脱合意の修正案が採決される可能性があり、その内容によってはポンドの上昇余地が広がる可能性も見込めよう。英のEU離脱交渉は、離脱期限(3月29日)まで50日を切って、未だに、不透明感の極みにある。この期に及んでメイ首相の基本戦略は「問題先送り」と「時間切れの可能性を最大限利用した恫喝」だけで、金融市場には、「真面目にニュースを追っても無駄」といった、あきらめにも似た喪失感が漂う。14日には、1月29日同様、離脱合意に関する投票(所謂「意義のある投票」)は見送られ、「修正案」と呼ばれる、同合意に付随する各種提案のみが採決される可能性がある。その場で、前回同様、議会が政府に対して離脱期限の延長を強要できる修正案などが採決される可能性もあり、仮に、EU離脱期限が先延ばしにされる可能性が高まれば、ポンドが好感する可能性は考えられよう。11日(月)に発表された一連の英経済指標(10~12月期GDP速報値、12月貿易収支、12月鉱工業生産、12月製造業生産)は、全般に、予想を下回る数字となった。とりわけ、製造業生産の大幅な落ち込みは、上述、日系自動車会社の英生産取り止めの報と平仄の合う内容と言え、英に対する設備投資の落ち込みを示唆し、英経済の先行きに暗い影を落とす内容と読めた。しかし、ポンドの反応は、対ドル、対ユーロで若干軟調に振れた程度で、対円ではほぼ無反応。離脱交渉の行方が混沌とする中で、英経済の現状に対する関心は低く、13日(水)に英1月CPI、15日(金)には英1月小売売上高の発表が予定されるが、ポンドが大きな反応を示す可能性は考え難い。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/4~2/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2854 高値 1.3104 終値 1.2939

(対円) 安値 141.13 高値 144.18 終値 142.04



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 今村 加奈子

(1) 今週の予想レンジ: 0.6950 ~ 0.7200 76.50 ~ 79.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週の豪ドル相場は、豪州利下げの思惑から0.72台から0.70台へ下落した。4日、豪ドルは0.72半ばで取引が始まり、通常は注目度の低い豪州指標・住宅建築許可件数であるが、ここ半年ほど豪州住宅価格下落から注目度アップ、その結果は大幅に低い前年比22.5%減少となり豪州景気後退リスクから豪ドルを0.72前半へ押し下げた。翌日、豪州12月貿易収支の予想より高い貿易黒字額の結果より、豪州12月小売売上高の前月比0.4%減少に失望し豪ドルは0.72割れとなった。同日、豪州準備銀行(RBA)理事会では市場予想通り政策金利1.50%据置を発表。RBA声明では2019年の実質GDP成長率は3%前後、インフレ率は2%へいづれも下方修正、「労働市場は引続き力強い、引続き家計消費と住宅価格下落は不透明要因、通商摩擦などに伴い世界景気減速の兆候」などが示されたが、市場の予想ほどハト派的でなかったことから豪ドルは0.72半ばまで買い戻された。しかし、6日ロウRBA総裁の講演では「失業が増えインフレが停滞すれば利下げが適切となる可能性」が示され、ややタカ派であった従来の政策スタンスから「利上げあるいは利下げの双方のシナリオあり」へ変更、豪ドルは0.72をブレイクし0.71前半へ急落した。7日は市場で豪州利下げ観測広がる中、0.71を挟んだ商いとなった。8日、RBA金融政策報告書で「豪州住宅市場の大幅な減速が先行きにかなりの不透明感をもたらしている」との見方を示し、実質GDP成長率について、2019年6月は前回の3.25%から2.5%へ、2019年12月は3.25%から3%へ下方修正され、豪ドルは0.7061まで下落し0.70後半引け。

先週の豪ドル/円相場は79円台から77円台へ軟調推移した。4日、豪ドル円は79円30銭近辺でオープン、材料探しの中、79円前半~79円半ばでのみみ合いとなった。5日、予想より弱い豪州小売売上高の結果を受けて上値が重くなり79円前半へ小緩んだが、RBA理事会の声明は市場予想ほど国内景気に弱気ではなかったことからショートカバーとともに79円後半まで上昇した。翌日、ロウRBA総裁の講演での「利下げの可能性」発言に市場の注目が集まり、豪ドル/円は78円後半まで急落した。8日、RBA金融政策報告書で「利上げと利下げの可能性は以前より均衡」などが示され豪ドル売り/円買い、78円をあっさりブレイクし77円半ばへ軟調推移し77円後半引けとなった。

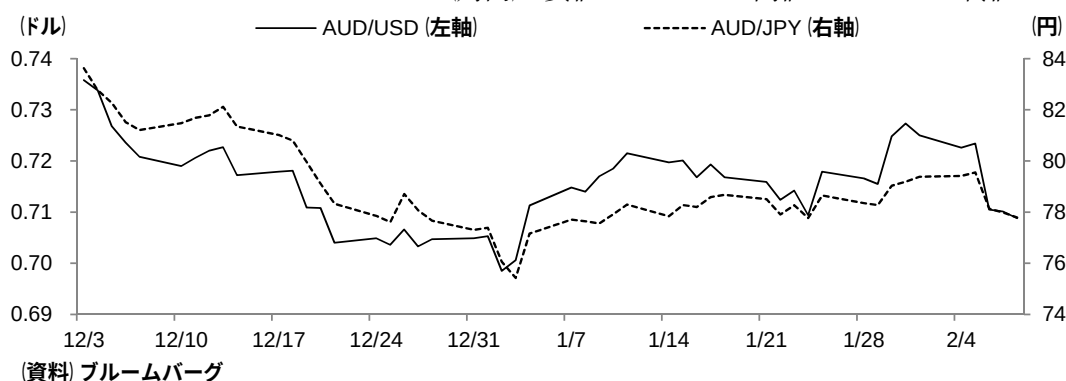
今週の豪ドルは、豪州利下げ観測を受け、上値が重い展開となろう。豪州の住宅価格下落が引き起こす景気減速に警戒感が強まっている。先週のRBA発言において利下げの可能性を示したことから豪ドル下値テスト継続を予想、まずは0.70を再度ブレイクできるかどうかを注目。今週は特に重要な豪州経済指標の発表はないが、住宅市場に絡む指標として12月住宅ローン件数が12日(火)に予定され、前月比2.0%減少予想となっている。米国では14日(水)にCPI前年比1.5%が予想されており、米国の利上げ休止観測に絡み注視されよう。

(3) 先週までの相場の推移

先週 (2/4~2/8) の値動き:

(対ドル) 安値 0.7061 高値 0.7265 終値 0.7090

(対円) 安値 77.44 高値 79.85 終値 77.79



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。